

## 中国長江三峡考 <華陽国志>「巴亦有三?」をめぐって

著者	飯塚 勝重
著者別名	IIZUKA Katsushige
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	31
ページ	15-40
発行年	1996
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010097/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010097/</a>

# 中国長江三峡考

——〈華陽國志〉「巴亦有三峽」をめぐる——

## 飯 塚 勝 重

### はじめに

中国長江（揚子江）の三峡ダム工事は、一九九四年十二月十四日、正式に着工され、現在における世界最大の水利工事として注目をあびている。工事は西暦二、〇〇九年までかかって完成される予定である。工事は、第一には大規模洪水の防止であり、第二に発電による電力確保、第三に下流と上流を往復する水上交通（観光を含む）の大規模化、第四に漁業・灌漑など経済開発および北方への水不足調節である。

この三峡とは、長江六、三〇〇kmの流域の上流の末端に位置し、四川省東南隅から湖北省西南部にかけて、およそ二〇〇kmの間、断崖絶壁に囲まれた大峡谷の連続をいう。その上、長江を縦断横断する背斜構造による山容が水中に隠れて岩礁（灘・堆・梁・礮・硃などと呼ばれる）となり、広く、浅く、または深く鋭く突出し、かつては船舶の航行を妨害することが甚しかった。この区間は、風景絶佳の上、その形状や土地の伝説などを象徴して幾つかの峡谷名がつけられている。三峡とはその主なものを取り、上

流から下流にかけ、瞿塘峡・巫峡・西陵峡をいう。二四〇kmのうち、瞿塘峡は全長七・五km、瞿塘灘により名づけられている。巫峡は全長四四・五km、海拔千米を超える巫山からつけられ、一名巫山峡ともいう。西陵峡は全長六九km、西と東の二段に分れるが、東段の終末は山容も低まり、江面は一抛に幅六〇〇米を超える広さとなる。西陵山、或いは現在湖南省宜昌市の旧名、夷陵により名づけられたと言われる。

三峡ダムはこれらの内、西陵峡の中段に位置する、湖北省宜昌市三斗坪鎮、中堡島の花崗岩地帯を利用し、全長一、九八三米、高さ一八五米の堰堤を設け、通常水位一七五米、総貯水量三九三億立方米、約六〇〇kmの上流・重慶市にまで達する河道型大人造湖を造ろうとするものである。この工事に至る歴史的過程や工事の規模、完成後の諸方面への影響などについては、既に世界史的課題として議論され、中国国内の長く、かつ周到な検討経過を経て実施に到ったものである。しかし、なお一部には賛否の議論も残されているが、現実的に着工に入り、中国国内では大旨議論はまとめられていくかのである。現に筆者も一九九四年五月と一九九六年八月

に現地を通過したのであるが、その時点で、僅かの間に、既にダムの外貌が分るまでになっており、工事のピッチの早さに驚いたものである。

こうした三峡工事の諸問題は、その結果について後に若干触れることになるが、本稿では直接にそれらの問題をとりあげようとするものではない。中国の長い歴史の中で、いわゆる三峡がどのようにして出現し、どのような変遷をたどっているか、名称上の問題を主としながら、歴史地理上の問題として追及してみたい。長江流域にはそれぞれ特長のある地域が多くあるが、華南の東西を扼する位置にあった三峡程、歴史的にも話題となったものはないのである。

本稿では、三峡ダムに至るまでを歴史的三峡、或いは古三峡と呼び、ダム完成以後を新三峡と呼ぶ場合があることを最初にお断りしておきたい。

世界第三の大河、長江は、現在は青藏高原、青海省境の唐古拉山脈、格拉丹雪山（海拔六、六二一米）の麓を源泉とし、沱沱河、通天河、金沙江を経、四川省宜賓において、かつて長江本流とされた岷江と合流し、長江となる。岷江から下流まで、かつては江水、揚（楊）子江といい、また、宜賓から湖北省までの間、岷江支流と合わせた沱江、かつて、西漢水と呼ばれた嘉陵江、貴州省を流れる烏江などを合わせ、三峡地区を通過して、江漢平原に入るまでを蜀江或いは川江とも別称していた。<sup>6)</sup>

本稿では引用文献に関わる以外はこの流域も一般的に長江と呼ぶこととする。

なお、本論では、歴史的な三峡を扱う場合、この長江の流域を一括して巴・蜀の地として通称するが、これは大旨、現在の四川省、湖北・湖南省の東南・北角に当り、東部の巴と西部の蜀に二分される。西部高原以東の、

印嶺山脈、大涼山脈、大婁山脈、巫山山脈（明月山脈）、大巴山脈などの諸山脈に囲まれた範圍を主とし、場合により雲貴高原に言及することを予めお断りしたい。またこの地域は従来、巴夷、巴蛮、西夷、西戎、西南夷などの地と呼ばれ、漢民族および少数民族の交錯する地域で、族源問題、居住地域問題など、未解決な問題が多く残っているが、本稿の性質上、随時専門諸家の研究成果を参照させて頂くに止めたい。

### 一、中国長江の出現

今日の中国の地質学上の説明では、三峡の出現は四川省盆地の出現と相互に関連がある。

今から一・八億年前、それまで海であった四川方面は、地球上に発生した造山運動により、昆崙山脈やそれに連なる巴顏喀拉・秦嶺山脈などが突出し、長江中・下流が陸地となって、雲貴高原などが出現した。さらに横断山脈により東より西に向って、雲夢沢・巴蜀湖・西昌湖・滇湖などが連続して西方の海面に連なっていたという。一・四億年前ジュラ紀から一億年前の白亜紀にかけ、長江上流の方から次第に地殻の隆起があり、巫山等の山脈が横断・隆起し、四川盆地は陥没するとともに、造山運動によって古長江の形ができてきた。しかし、白亜紀に入って四川盆地は次第に上昇し、逆に雲夢・洞庭盆地は下降を続け、やがて巫山を分水嶺とする東西の旧長江が出現した。およそ三・四千万年前、始新世代に入り激しいヒマラヤ運動により、青藏高原などが出現、約三〇〇万年前頃、激しいヒマラヤ山脈の隆起とその影響により、長江流域の西部が更に上昇し、湖北より四川盆地に向って流れていた古長江は逆流し、浸蝕作用によって遂に巫山山

脈を貫通し、現在のような長江の流れが完成したと<sup>(7)</sup>言う。

長江三峡がこのような地質学上の経過によって形成されたものとして、偶然の一致であろうか、地元に伝わる次の説話がある。

北魏・酈道元《水経注》卷三三・江水の条に、蜀国の開辟を伝えるものとして、

来敏本蜀論曰、荆人鬻令死、其尸随水上、荆人求之不得、鬻令至汶山下、復生、起見望帝、望帝者杜宇也、從天下、女子朱利、自江原出、爲宇妻、遂王于蜀、号白望帝、望帝立以爲相、時巫山峽而蜀水不流、帝使鬻令鑿巫峽通水、蜀得陸処

とあり、仮りに、後世にも起り得た、三峡峽谷中の岩壁の崩落現象によって、谷中の水流が塞ぎ止められ、それを杜宇が水利作業に従って開通させたことを反映したものとしても、いかにも巫峽が挟隘であったということ<sup>(8)</sup>を、伺わせる説話の一つである。

一方、文献上の言えば、長江上流の事情が、当時のいわゆる中原に明らかになされ、三峡、もしくは三峡を構成する個々の峽名が記録されるに至るのは、戦国時代末、西方の秦が南方の楚に対する侵入を始めたことによる。

遠交近攻、合従連衡を繰り返して、次第に強国となった秦は華南の大国楚の背後を衝くため、先づ隣国、蜀と巴への侵入を図る。《史記》卷五・秦本紀、惠文王初更九（前三一六）年に、

司馬錯伐蜀、滅之

とあり、これより先、秦將司馬錯らによる蜀への進出が行われる。《史記》卷七〇・張儀伝に、

苴・蜀相攻撃、各来告急於秦、秦惠王欲發兵以伐蜀、以爲道險狹難至、而韓又来侵秦、（略）司馬錯曰、（略）夫蜀、西僻之國也、而戎翟之長也、（略）得其地、足以広国、取其財、足以富民繕兵、不傷而彼已服焉、不如蜀完、惠王曰、善、寡人請聽于、卒起兵伐蜀、十月、取之、遂定蜀、貶蜀王更号爲侯

とあり、張守節《正義》に『表云秦惠王後元（前三二四）年十月擊滅之』とある。張儀は当初、巴蜀への進出よりは、目前の対韓対策、或いは漢中を仲介とする楚との直接対決を主張していた。しかし、秦が巴・蜀進出策を取ることにより、自ら楚に赴き、楚の懷王に次のように警告を与えた。前掲張儀伝に、

秦西有巴・蜀、大船積粟、起於汶山、浮江已下、至楚三千余里、舫船載卒、一舫載五十人与三月之食、下水而浮、一日行三百余里、里数雖多、然而不費牛馬之力、不至十日而距扞關、扞關驚、則從境以東尽城守矣、黔中・巫郡非王之有、（略）夫待弱國之救、忘彊秦之過

とある。秦はその警告通り着々と南進し、《史記》卷五・秦本紀、昭王三十七（前二八〇）年に、

又使司馬錯發隴西、因蜀攻楚黔中、拔之

とし、続いて同三〇（前二七七）年に、

蜀守若伐楚、取巫郡及江南、爲黔中

とあり、その結果、同卷四〇・楚世家、傾襄王の伝に、

十九（前二八〇）年、秦伐楚、楚軍敗、割上庸・漢北地予秦、二十（前二七九）年、秦將白起拔我西陵、二十一（前二七八）年、秦將白起遂拔我郢、燒先王墓夷陵、楚襄王兵散、遂不得我、東北保於陳城、二十二

(前二七六)年、秦復拔我巫・黔中郡

とあり、同卷七三・白起伝も同様記事を伝える中で、

其明年〔秦昭王二十九(前二七八)年〕、攻楚、拔郢、燒夷陵、遂東至竟陵、楚王亡去、東走徙陳、秦以郢爲南郡

として、ここに長江上流域が秦の制圧する所となったのである。しかし、巴・蜀はもともと西南夷と隣りあい、巴夷・巴蛮の地とも言われ、漢側の進出の遅れた地域であった。<sup>(9)</sup> また、三峽のみならず、長江上流の急湍、狹隘、岩礁による川中の障害の多さなどから、舟運は最も危険な水路であり、つい最近まで東西の交通を妨げていたことも事実である。

このような長江の開発の開始と、それにも勝る交通上の障害を越えて、いわゆる三峽が歴史上に登場するのにはどのような背景があったか、次節以降で扱っていききたい。

## 二、〈水経注〉における三峽

一般に現在の三峽につながる文献上の初出は、酈道元〈水経注〉であると言われる。<sup>(10)</sup> しかし、この三峽は歴史的に言えば必ずしも現在の個々の名称と同一とは言えず、時代により様々な名称をもっていたようである。これらのことは今後漸次追及することとし、先づ〈水経注〉関連記事の紹介から始めてみたい。以下各史料上のアルファベット等は筆者の都合により付したものである。

〈水経注〉卷三三の江水篇に、

(A) 江水又東逕魚復縣故城南、故魚国也、(略) 地理志江關都尉治、公孫述名之爲白帝、取其王色、蜀章武二年、劉備爲呉所破、改白帝爲永安、

巴東郡治也、(略) 江水又東逕広溪峽、斯乃三峽之首也、其間三十里、(略) 峽中有瞿塘・黄龕二灘、夏水回復、沿沂所忌、(略) 其峽蓋自昔禹鑿以通江、郭景純謂巴東之峽、夏后疏鑿者也、

とあり、第一峽として広溪峽の名をあげている。名称の由来は明らかではないが、これは明らかに後の瞿塘峽のことである。

さて、第二峽である。同書卷三四に、

(B) 又東出江關入南郡界、江水自関、東逕弱関・捍関、廩君浮夷水所置也、弱関在建平・秭帰界、昔巴・楚数相攻伐、藉險置関、以相防捍、秦兼天下、置立南郡、自巫下皆其域也、(略) 江水又東逕巫県故城南、県故楚之巫郡也、秦省郡、立県以隸南郡、呉孫休分爲建平郡、(略) 故夔国也、江水又東、巫溪水注之、(略) 江水又東逕巫峽、杜宇所鑿以通江水也、(略) 江水歴峽東、逕新崩灘、(略) 其下十余里、有大巫山、非惟三峽所無、乃当抗岷・峨、偕嶺衡・疑、其翼附羣山、(略) 其間首尾一百六十里、謂之巫峽、蓋因山爲名也、自三峽七百里中、兩岸連山、略無欠処、重巖疊嶂、隠天蔽日、自非停午夜分、不見曦月、(略) 有時朝發白帝、暮到江陵、其間千二百里、雖乘奔御風、不以疾也、(略) 故漁者歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三声淚沾裳

第二峽は巫峽であり、起点は現在の巫山県である。峽名は巫山山によって名づけられたとあり、古来より現在まで続いた名称である。僅かに巫山峽または仙山峽と変名する程度である。但し、注目すべきは、地元漁者の歌に「巴東三峽」とあることで、これは後に再び触れることとしたい。

次に第三峽であるが、流域が最も長く、かつ二段に分れ、寛狭急緩の流れに加え、舟行に危険な個所が多い。従って、峽中峽あって名称も多いが、

通過の旅客によつて灘所に目を奪われ、峡谷の影観を嘆賞する暇もなく、或る人は峽名を記し、或る人は灘所を記すようである。同書卷三四に、

(C)又東過秭歸之南、峽故歸鄉、地理志曰歸子國也、(略)宋忠曰歸即夔、歸鄉蓋夔鄉矣、古楚之嫡嗣有熊羆者、以廢疾不立、而居于夔、爲楚附庸、後王命爲夔子、(略)袁山松曰、屈原有賢姊、聞原放逐、又来歸、(略)因名秭歸、(略)故宜都記曰、秭歸蓋楚子熊繹之始國、而屈原之鄉里也、(略)江水又東逕歸鄉故城北、(略)東帶鄉口溪、(略)逕狗峽西、峽崖轟中石、隱起有狗形、形城具足、故以狗名峽、(略)又東過夷陵界南、江水自建平至東界峽、盛弘之謂之空冷峽、峽甚高峻、即宜都・建平二郡界也、(略)江水又東逕流東灘、其水竝峻激奔暴、(略)袁山松曰、自蜀至此、五千余里、下水五日、上水百日也、(略)江水又東逕黃牛山、下有灘、名曰黃牛灘、(略)故行者謠曰、朝發黃牛、暮宿黃牛、三朝三暮、黃牛、如故、(略)江水又東逕西陵峽、宜都記曰、自黃牛灘東入西陵界、至峽口百許里、山水紆曲、而兩岸高山重障、(略)所謂三峽此其一也、(略)江水出峽、東南流、逕故城洲、(略)北對夷陵界之故城、

以上の〈水經注〉本文を長く引用したのは、こうした鄭道元の記した自然状況が、近世に至るまで殆んど変ることなく続き、そのため、時代を経ることによる峽名の変遷や三峽構成論の変遷が、この〈水經注〉を基準として考えていくことが出来るからである。しかも、第三峽について、〈水經注〉では、『江水又東逕西陵峽、(略)所謂三峽此其一也』としながらも秭歸から夷陵(宜昌)までに数個の峽名をあげ、西陵峽は終末(湖北からは入口)の一部を示しているかのである。こうした〈水經注〉の三峽が、大形船舶によつて安全に航行できるようになるのは、欧米列強および

日本が中国諸港の開港を求め、日清戦争により重慶が開港したことに伴ない、『英人リトル (Archibald Z. Little) が一八九八年、小蒸汽船利川号 (1100t) を、ついで一八九九年イギリス軍艦ウッドコックおよびウードラック号 (共に一五〇t) が長江を重慶まで遡江した』ことに始まるが、その後、ダイナマイトによる岩礁爆破など水道開鑿工事を経るまでは、軍艦といえども座礁の危険に常にさらされていたようである。

本論では、個々の峡谷の状況の歴史的变化を刻明にすることが全ての目的ではない。ただし、〈水經注〉には後世諸家の注釈があり、楊守敬(熊会貞参疏)の〈水經注疏<sup>(12)</sup>〉は最も多くそれを収録しており、それを参考に個々の峡谷の名称、状況を比較できるのであるが、それを暫くおいて、果して「三峽」なる語が〈水經注〉以前にどうあったのか、初出的にはいかなる文献に求めるべきか、次節以降で明らかにしたい。

### 三、〈文選〉における三峽

三峽という語の初出の史料は、〈文選〉(梁・昭明太子撰<sup>(13)</sup>)卷四・左思〈蜀都賦<sup>(14)</sup>〉にみられ、さらに同卷一二・郭璞(景純)〈江賦<sup>(15)</sup>〉がこれに関わる。左思(太仲)は、紀元二八〇年頃、〈三都賦〉を作り、洛陽の紙価を高めたと言われる。この中の〈蜀都賦〉において、蜀中の風物を余す所なく明らかにしたのであるが、それを覆う地域は、

(D)夫蜀都者(略)、廓靈関而爲門、包玉壘而爲宇、帶二江之雙流、抗峨眉之重阻、水陸所湊、兼六合而交会焉、豐蔚所盛、茂八区而菴藹焉、於前則跨躡鍵狎、枕騎交趾、經余所亘五千余里

とあり、岷江の流域を下る中で、靈関・玉壘(山)・峨眉(山)・鍵(爲)・

群(柯)・交趾の地名があり、ほぼ現今の四川省から貴州省、雲南省の一部を含み、当時の蜀および南中(晋代の寧州・現在の雲南地方の総称)の地を南北に貫ぬいている。さらに東西を言えば、

於東則左縣巴中、百濮所充、外負銅梁於宕渠、内函要害膏腴

於西則右挾岷山、湧瀆發川、陪以白狼、夷歌成章

とある。《蜀都賦》における巴は、現今の四川省を蜀と二分するが、後漢の時代迄、秦が進出した嘉陵江に沿ったルートで下流の江州、後に巴県今の重慶を中心として開発される。後漢の初平元(一九〇)年、益州牧劉璋の時、先づ墊江以北を巴とし、江州より臨江(四川省忠県)を永寧郡、朐忍(四川省雲陽県)より魚復(四川省奉節県)を固陵郡とすること、ここに巴は三分される。建安六(二〇一)年には、永寧郡が巴郡、固陵郡を巴東郡、巴郡は巴西郡とされ、ここにいわゆる三巴が成立する。<sup>(19)</sup>《蜀都賦》の巴中は、外側に宕渠(四川省渠県)の銅梁山ありとすれば、ほぼ、今の嘉陵江流域に限られるであろう。蜀の西は云うまでもなく、岷山を中心に岷江の諸流域を示している。

大よそこの様な地域を示した《蜀都賦》は、蜀の中心、成都の状況を詳しく述べた後、次の様にいう

(E)若夫王孫之属、郤公之倫、從禽於外、巷無居人、(略)西踰金堤、東越玉津、(略)志未馳、時欲晚、追輕翼赴絶遠、出彭門之闕、馳九折之坂、經三峡之崢嶸、躡五岷之蹇澹、(略)如滇池、集乎江州

ここに始めて三峡の名が出現する。今、この賦にそって現在の地名を充ててみると次の様になる。

金堤は今の四川省灌県の地にあり、玉津は今の四川省彭山県。<sup>(17)</sup>彭門は今

の四川省彭縣西北。<sup>(19)</sup>九折之坂は唐の劉良の注に「九折坂在漢壽・嚴道県、邛来山」とあるように、今の四川省榮經県西の邛来山。<sup>(20)</sup>五岷は今の四川省峨眉県西南、唐の李善注に「在越嶲、当犍爲南安県之南也」とある。滇池<sup>(22)</sup>は今の雲南省昆明県の滇池であり、江州は四川省江北県にあたる。<sup>(23)</sup>

以上の様な文脈からみれば、(E)における三峡はむしろ、蜀と巴の間にある、しかも蜀から南中に向かう方向にあったのではないかとさえ伺えるのである。

但し、劉良注に『三峡、巴東永安県有高山、相对相去可二十丈、左右崖甚高、人謂之峽江、水過其中』とあるが、これは現在の三峡にあたり、《水経注》以来の地理知識が唐代に充分に知れ渡っていた事に依るものではないであろうか。これに関して、東晋元帝(三一七—三二三在位)に仕えた前引郭璞(二七六—三三四)の《江賦》を見ると、江水を上流から叙述していく中で

(F)若乃巴東之峽、夏后疏鑿絶岸、万丈辟立赧駭

とあり、唐・李善注は

(G)善曰、盛弘之荊州記古歌曰、巴東三峡、巫峽長、猿鳴三声、淚沾裳とし、同じく唐の李周翰の注は

翰曰、巴東地名、有三峡山、禹鑿之通江水、絶岸高万丈、石壁如立、而

雲霞班駁

とある。この両者の注では明らかに現今の三峡を巴東三峡と称しており、郭璞の「巴東之峽」は、左思の三峡と異なる地理的状况を示しており、ここに二つの三峡がみられるのである。ここで節を改め、同じ東晋代に著された《華陽国志》からこの問題を考えてみたい。

#### 四、《華陽国志》にみる三峡

第二節で記したように、巴・蜀の地、および長江上流が秦側によって開発されるとともに、次第に長江の流れの細部が知られ、開発に利用されるようになる。《史記》卷六・秦始皇本紀に、

政代立爲秦王、当是之時、秦地已并巴・蜀・漢中、越宛有郢、置南郡、

(略) 二十六(前二二)年、(略) 秦初并天下、(略) 分天下以爲三十六郡、郡置守・尉・監

とあり、裴駰・集解注は『三十六郡者(略) 巴郡・蜀郡・黔中・長沙』などとあるように、この地域が秦による郡・県体制の中に組み込まれ、いわゆる漢化が浸透することになった。<sup>(25)</sup>

このような歴史的経過に刻明な地誌を組み合わせて、開僻以来から東晋中葉までの西南中国の歴史を著したものに、東晋・常璩撰《華陽国志》十二卷がある。本書の成立はAD三五〇年頃と言われ、<sup>(26)</sup>蜀地江原県(今の四川省崇慶県)の民族の出と言われる常璩は、氏族出身の李氏成漢(AD三〇二—三四七)に仕え、後、東晋に降った経過から、常璩のみによってしか記録され得なかった記事も多く、歴代正史の欠を補っているが、三峡についても独自の問題があり、以下にこれを明らかにしていきたい。

なお、《華陽国志》の注釈については、中国において、任乃強氏《華陽国志校補図注》<sup>(27)</sup>(以下《任氏校補図注》という)および劉琳氏《華陽国志校注》<sup>(28)</sup>(以下《劉氏校注》という)があり、日本において中林史朗氏<sup>(29)</sup>および東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究員による共同訳注作業(以下《訳注稿》という)<sup>(30)</sup>などがある。特に任乃強氏の校注は精細を尽している。

本稿はこれらの成果に助けられていることを予め記しておきたい。

《華陽国志》卷一・巴志には、巴郡・巴東郡、涪陵郡・巴西郡・宕渠郡の六郡をあげ、総説としてその郡の成り立ち、地理的環境、特産物、居民の状況(蛮夷の統治との関係)などを記した後、属県の各々に豪族・大姓名を含む地誌を記している。この巴郡総説の中で、分郡の議の後三巴の成立となった経過を記した上で、

(H) 巴子時雖都江州、或治墊江、或治平都、後治閬中、其先王陵墓多在枳、其畜牧在沮、今東突碛下畜沮是也、又立市於龜亭北岸、今新市里是也、其郡東枳有明月碛、広徳嶼、故巴亦有三碛、(略) 江州郡、郡治、塗山有禹王祠及塗后祠

とある。この一文は「有三峡」と言いながら東突碛、明月碛、広徳嶼をもつて三峡というのか、巴(其)郡東の枳に三峡が連続してあるのか、あるとしても明月峡(碛)のみしか、峽名が読み取れない。清・元和の人顧広圻(本節注26)(一七七〇—一八三九)は広徳嶼に校訂(国学基本叢書本による)し、『按此有誤也、以水經注訂之、当作黃葛碛、故下文言巴亦有三碛、統漢書志注引此作広徳嶼、当是伝写之誤、而李奎又依彼誤改此耳』とあり、広徳嶼は黄葛碛の「伝写誤」であり、東突碛・明月峡・黄葛碛であると主張されるようである。三峡の個々に大きな問題が残るが、先づ「巴有三碛」とは何か、個々の峽名と併せてこの問題を考えていきたい。

同書卷一・巴志に、巴郡の統県を示して、

(I) 江州郡郡治、(略) 枳県、郡東四百里、治涪陵水会

とあり、枳は今の四川省涪陵県で、江州県(重慶)から東四〇〇里(一二〇km)にあり、涪陵水(現烏江)が長江に流れ込む西岸にあるとする。<sup>(31)</sup>と



すれば、「巴の三峡」は今の重慶市から長江を下って今の涪陵県近辺迄にあったことになる。筆者はすでに現今の三峡は、〈水経注〉成立以前、『巴東之峡』または「巴東における三峡」と認識されていた可能性を指摘した。それと同時に、〈水経注〉の成立に至る迄に、「巴の三峡」が、いわゆる三巴諸郡のうち、巴郡の長江流域中において存在し、巴東三峡とは別であったということを再認識しておきたいのである。因みに宋、范成大の『呉船録』<sup>(32)</sup>には、

(淳熙四・一一三七年)(七月)康成(十三日)、泥培を出発、六十里にして恭州に至る。これより峡路に入る。

と、恭州(今の重慶)から三峡路へ入ったという認識があったと思われるが、それでは、この巴の三峡にいかなる問題があるのか、峡名、構成上の諸問題について節を改め検討を加えたい。

## 五、巴の三峡

〈水経注〉卷三三・江水篇に

(J)又東北至巴郡江州県東、(略)江之北岸有塗山、(略)又東至枳県西、延江水從牂柯郡北流西屈注之、江水東逕陽関巴子梁、江之兩岸、猶有梁処、巴之三関、斯爲一也、延熙中、蜀車騎將軍鄧芝爲江州都督治此、江水又東逕黃葛峽、山高峻、全無人居、江水又左逕明月峽、東至梨郷、歷鷄鳴峽、江之南岸有枳県治、華陽記曰、枳県在巴郡江州東四百里、治涪陵水会

とあり、巴郡郡治たる江州を記述した後、直ちに『東至枳県西』とあり、「陽関巴子梁」から『江之南岸有枳県治』までに、丁度〈華陽国志〉に

う巴の三峡に該当するかのよう、黄葛峽、明月峽、鷄鳴峽があったとする。しかも、〈華陽国志〉に有った「東突峽」は〈水経注〉江州県近辺の記述には一切表れていない。そこで、陽関巴子梁であるが、〈水経注〉の『江水東逕陽関』が、本文に当る「枳県西」の記述の後に注としてあるため、東としての起点が何処からか決め難い。ここで前掲揚守敬『水経注疏』の説を引いてみたい。

(K)守敬按、括地志稱涪州之陽関、實字記亦云在涪州界、<sup>(33)</sup>明地理志在涪州西、<sup>(34)</sup>禹貢錐指・一統志並云巴県東、<sup>(35)</sup>挾此注、巴子梁在陽関、而方輿紀要以横石灘当之、似誤、黄石見下

と、諸書の説を勘案すると、巴(江州)県の東、涪州(枳、涪陵県)の西でしかも涪州の界にあるというが、やゝ莫然とした指摘である。また、〈三国志〉卷三三・後主伝、延熙十一(二四八)年の条に

秋、涪陵属国民夷反、車騎將軍鄧芝往討、皆破平之とあり、同書卷四四・鄧芝伝には

頃之爲督江州

とあるが、それ以上の記事を伝えていず、陽関と江州の関係が必ずしも明らかではない。

しかし、一応陽関巴子梁が(K)のように涪州界にあるとすれば、黄葛峽もまたその東(下流)にあり、「陽関巴子梁」から「江之南岸」までに三峡があったと考えるのが順序ではないだろうか。

以上の事を踏まえ、さらに〈水経注疏〉の各峽の注釈に従って考えてみたい。

先づ〈水経注疏〉は黄葛峽について、

(L) 守敬按、初学記八引益州記作黃葛峽、而杜甫詩云、黃草峽西船不歸、

又通鑑唐大歷四年、涪州守捉使王守仙伏兵黃草峽、胡氏引此注謂即一峽、

蓋葛、草形近錯出也、惟明地理志謂大江入涪州東、逕黃草峽、蜀游日記、

黃葛峽約在明月峽之下百余里、与鄭氏先叙黃葛、後叙明月不合、考名勝

志引図經云、塗山之足、有古黃葛樹、其下有黃葛渡、一統志謂即黃葛峽、

則峽在今巴東

楊守敬の考案は、今の長壽県東と涪州、今の涪陵県の境に入った所に黃草

峽があり、黃葛峽のことであるという。しかし、それは明月峽の下流百余

里にあるが、一方、巴東の東に黃葛峽があったともする。では、この三峽の

基点の明月峽はどこであったのか、続いて「水経注疏」は次のように記す。

(M) 守敬按、華陽国志一、枳有明月峽、御覽五十三引李膺益州記、広陽州

東七里、有遮要二埵石、石東二里至明月峽、峽前南岸、壁高四十丈、其

壁有円孔、形如満月、因以爲名、寰宇記在巴東東北八十里、重慶府志在

県東五十里

今、楊守敬は、個々の引用書に基き、明月峽が涪陵界にあるとし、巴東

(重慶) の「東北八十里」或いは「県東五十里」を挙げることにし、前

引(L)により、黃草(葛)峽はこれよりさらに東(下流)百里の地にあるこ

とになる。それでは第三峽はどこにあるか、同じく「水経注疏」は

(N) 守敬按、元和志、鶏鳴峽在涪陵県西十五里、唐涪陵県即今涪州治

とあり、さらに前引(J)の「江南岸有枳県治」について同書(ハ)内は

「宋代地理叢書四種・文海出版・一九六二」による異同に、

(O) 守敬按、寰宇記引四夷県道記(志)、涪陵故城在蜀江南、涪江(陵)西、

其涪江、南自黔中来、由城之西、泝(なし)蜀江十五里、有鶏鳴峽、上

有枳城、即漢枳県(也)

とある。

以上の「水経注」および「水経注疏」によって得られる一応の位置関係

は次の様に見える。

(1) 黃葛(草)峽。陽関巴子梁東、黃葛峽は塗山之足、黃葛渡か。黃草(葛)

峽は江州県東、長壽県東涪州界に入る、明月峽下百余里か。

(2) 明月峽。枳県西、東至梨郷。広陽州東七里遮要二埵石東二里、巴東東北

八十里、重慶府東五十里

(3) 鶏鳴峽。枳県治涪陵水会、泝蜀江十五里

ここで、唐および明代の記録を紹介しておきたい。

唐、李吉甫撰「元和郡県図志」卷三〇・江南道、黔州觀察使、涪州、総

叙に

(P) 武徳元(六一八)年立爲涪州、在蜀江南、涪江西、故爲名、上元二

(七六一)年、因黃李峽有獠賊結束

とあり、その校勘記に

今按、殿本同、它本李作草、攷證云、官本作李誤、水経注江水又東右逕

黃葛峽、又左逕明月峽、江之右岸有枳県治、黃草疑即黃葛別名

とあり、黃草峽と黃葛峽を同一と見、涪州(涪陵県)内にあることと言っ

ている。同書は続いて同州涪陵県の条において

(Q) 鶏鳴峽山、在県西十五里、先主時、涪陵人反、蜀將鄧芝討焉、至鶏鳴

峽、見援母子相抱、芝引弩射中援母、(略)芝投弩水中、

とあり、前引(N)の鶏鳴峽を印象づける。

以上の「華陽国志」の記事に沿って、「水経注」および「水経注疏」な

どを合わせみると、《水経注》は《華陽国志》の前引(H)の「郡東枳有三峡」に基き、巴県（重慶）から枳県（涪陵）の範囲で考えられているかのようである。なお、東突峽および広徳嶼が、《水経注》ではどのように考えられていたのかは明かではない。

次に明代の記録として、《明史》、《大明一統志》をあげてみよう。

《明史》卷四三・地理志、重慶付の条に

(R)巴県、東有塗山、大江經城南、又東經明月峽、至城東、与涪江合、

(略)東有銅鑼関、

とあり、また同涪州について

(S)涪州。大江自長寿县流入、東逕黄草峽、(略)又南有涪陵江流合焉、

江口有銅柱灘(略)又西有陽関

とある。これについて、《大明一統志》卷六九・重慶府、山川の条に峽名を幾つかあげているが、明月峽、石洞峽がこの地域に該当する。

(T)明月峽、在巴県境、梁李膺益州記石壁四十丈、壁有円孔形如明月因名、

華陽国志広徳嶼者是也

石洞峽、在巴県、寰宇記劉備置関之所、華陽国志巴亦有三峡謂此

とあるが、明史(R)では巴県の城南と城東の間に明月峽があるとし、一統志は《華陽国志》前引(L)に照合して、明月峽と広徳嶼が同一とする。以上の経過は改めてさらに問題が複雑多岐であることを思わせ、同時に新たに石洞峽がどこにあったのかも問題となる。

各時代の史料は各説各様となり、どれが第一峽で、どれが第二、三峽であるか、益々混乱するばかりである。そこで、《清史稿》および《大清一統志》に当り、ついで任乃強、劉琳両氏の説を参照して一応の見通しをつ

けたいと思う。

《清史稿》卷六九・地理、四川・重慶府、巴県の条に

県東有明月峽者、大江逕此

とあるのみであるが、《大清一統志》卷二九五・四川省、重慶府、山川の条によると、全て八峽の名が連なっているが、その内黄葛峽、石洞峽、明月峽、銅鑼峽、鶏鳴峽の五峽が巴県の東方にあり、大茅峽、魚鹿峽、温湯

峽の三峽が巴県の西方にある。今、巴県東方の五峽を紹介すると、

(4)黄葛峽、在巴県東、酈道元水経注江水右経黄葛峽山高險、全無人居、旧

志塗山足有古黄葛樹下有黄葛渡即黄葛峽也

(5)石洞峽、在巴県東北、寰宇記渝州東北二十里有石洞峽、即劉先主置関之

所、東西約長二里

(6)明月峽、在巴県東北、華陽国志巴郡東枳有明月峽、広徳嶼、故巴亦有三峽、寰宇記在巴県東八十里、李膺益州記云、広陽州東七里、水南有遮

要三埽石、石東二里至明月峽、峽首西岸壁高四十丈、其壁有員孔形若

満月、因以爲名、府志在県五十里

(7)銅鑼峽、在巴県東二十里、懸崖臨江、下有円石如銅鑼之状

(8)鶏鳴峽、元和志在涪州西十五里

以上について、前引の(1)から(3)までとこの(4)から(8)までについて重ね合わせてみると、(2)と(6)は同一で巴県東八十里とみてよい。ただ、(R)において巴県の城南と城東の間にありとするのが気にかかる。また、(5)と(7)は記述内容が若干異なるが、巴県東二十里ではほぼ同一カ所と見える、また(R)で巴県の東すぐであるとすると、《華陽国志》(H)の東突峽が俄かに注目されたものとなり、これが(J)の如く巴の三峡の一とすれば、石洞峽Ⅱ銅鑼峽Ⅱ東

突峽Ⅱ第一峽となる。そして(3)と(8)が全く同一であり、確証はないが、巴の三峽の一とすれば、これが第三峽となる。残る第二峽は、(1)の黄草峽か(4)の黄葛峽か、それとも(1)Ⅱ(4)であるか、そして(2)Ⅱ(6)の明月峽が有力であるとするれば、やゝ異説のある(1)或いは(4)についてどう位置づけるべきか、諸説が入り交り結論し難い、別表の関連記事表も参考にしてここで、任乃強・劉琳両氏の説を加えさらに検討を加えたい。

〈任氏校補図注〉二七頁で、任乃強氏は巴に三峽があることを認め、〈華陽国志〉は前引(田)の本文広徳嶼に続けて「及鶏鳴峽」を補うべきであるとし、その理由を次のように説明する(―線筆者)。

(U)今按、《水経注》明白爲黄葛・明月・鶏鳴三峽、以今地理考之、黄葛峽即東突峽、今云銅鑼峽、明月峽外有離堆曰尖山子、即広徳嶼、鶏鳴峽在枳界、応是旧本脱鶏鳴峽耳、茲補四字

として、《水経注》を基準として、現在地との対応を求めて、巴郡江州界(重慶)から枳界(涪陵界)までの間に黄葛峽・明月峽・鶏鳴峽とする。従って、《華陽国志》との整合性を求めるため、(4)Ⅱ(7)Ⅱ黄葛峽Ⅱ東突峽、(2)Ⅱ(6)Ⅱ明月峽、広徳嶼Ⅱ(2)・(6)の尖山子、(3)Ⅱ(8)Ⅱ鶏鳴峽とされる。その上、

(V)東突峽、今音訛爲銅鑼峽、在重慶市東、自朝天門、水程十里、陸程二十里、《水経注》謂黄葛峽、《寰宇記》謂石洞峽是也、畜沮、今広陽壩大洲(飛機場)是也、上距銅鑼峽二十里、在大江中、方広十余里

として、(5)の石洞峽も(4)(7)と同所とされ、水程十里、陸程二十里の場所とされる。しかし、任乃強氏のこれらの見解は直ちに幾つかの疑問を引き起す。例えば①東突峽と銅鑼峽の音訛説について、或いは②《水経注》のい

う黄葛峽が(1)または(4)の一説のように「塗山の足」にあるとすると、塗山の里程はいかなるものか、などである。①について言えば、《華陽国志》の東突峽が如何にして《水経注》の黄葛峽に変わったか。またそれが、《太平寰宇記》や《大清一統志》の石洞峽、《明史・地理志》や《大清一統志》の銅鑼峽となったのであろうか。単に音訛とは言えない時代差がありはしないか疑問とするところである。また②について言えば、次の諸家の説もある。

《太平寰宇記》卷一三六・山南西道、渝州・巴県の条に(―線筆者)、

(W)塗山在県東南八里、岷江南岸、高七里、周廻二十里、東接石洞峽、華陽国志、夏禹娶於塗山、今江州塗山是也、

とあるが、県の東南がどの測定によるものか不明であるが、東接石洞峽は江水の南岸にあることが伺われる。《大清一統志》卷二九五、重慶府、山川に『塗山在巴県東一里』とし、さらに『水経注江水北岸有塗山』を引いているが、任乃強氏が根拠とする《水経注》に塗山の足、黄葛峽の位置を合わせることができであろうか。これに対し、清の呉璣《遊蜀日記・後記》は光緒二(一八六九)年四月一日に『下午泊重慶府、(略)府東一里名塗山、華陽国志・水経注並言禹娶塗山、有廟銘尚存』とあり、<sup>(46)</sup>呉氏の場合も僅かに一里であると言う。また伊東忠太の重慶における「老君洞」についての日記では「重慶城より江を距て南方十五里に在り」とし、解説に「(スケッチは)塗山を背景にしている」とある。<sup>(47)</sup>

一方、これに対し、銅鑼峽についてであるが、(7)で巴県東二十里とあることに対し、清・洪良品は《東帰録》において同治九(一八七〇)年同所を通過した際、<sup>(48)</sup>『(銅鑼峽)去重慶府東二十里』とあり、日本、山川早水氏

は明治三十九年成都からの帰途、重慶を船で下り、「朝天門より下る二十五清里、唐家沱に達す。」と記している。またこれより先、明治三十六年二月十二日に重慶を出発した鳥居龍三氏<sup>(50)</sup>は「朝早く重慶を出発し、流れに随って下ること三十里、唐家沱に到着した。此処には税関船が停泊して」いて検査を受けたとある。この唐家沱に対し、もう一例あげると、清末、光緒十五年（明治二二・一八八九）年に刊行され、日本人旅行者も含め、当時三峡へ上る場合の絶好の教科書として、宜昌において珍重されたという、江国章〈峽江図攷〉がある。この書は、宜昌から重慶までの南北兩岸の光景および江水の流れ図を隙間なく書き入れ、その精巧なことに驚かされるのであるが、これによると、唐家沱について江江北岸に記し、『距江北城三十里』と注記し、さらにその斜め東、南岸の山に銅鑼峽と書き込んでいる。事実、任乃強氏も〈任氏校補図注〉において、扞関を説明する中で、『陽扞、（略）其故址今爲江北県之唐家沱、在朝天門下三十里、当銅鑼峽西口、有平地与江州接、故（鄧）芝駐此、以扞江州』とある。結局は東突峽すなわち塗山の足にある黄葛峽と銅鑼峽とは距離の差があるようである。〈新修支那省別全志〉（昭和十六年）第一卷四川省四九七頁〜五一〇頁には、『広元堆（江中）島州にして高さ凡百十呎、樹木密生し耕地多く、その間に人家が点在している。下端に飛行場がある』として、唐家沱まで重慶から水路七・五浬（二三・八九〇米、清里約二四・二）で、そのさらに下流に大興場、広元堆と続くのである。但し、われわれは次の諸点に注意する必要がある。それは、一つの峽谷の長さに対する、東西の入口または出口をどう考えておくか、また、その続き具合が他の峽谷とどのように関わるか、或いは北岸にまたは南岸に片寄って命名されている時、一方の岸はどうな

っているか、多くの文人墨客、または高級官僚が任地へ赴任、若くは帰任に伴ない長江を利用し、旅行記を著しているが、或る者は故事を十分に踏まえて観察し、感懐を述べるが、或る場合は、灘、堆の危難を目前にして、専ら通過の為に注意を払い、峽谷名より難所の記述に力点を置くなど様々である。また、上りは多くの日数もかかり、地元の水先案内人がつく関係からか、記述が詳細となるが、下りは舟足も足く、兎角記述は粗略になり勝ちである。特に地元で称名が変わっている場合は旅行者が正確にそれを伝えていたか注意を要する所である。そうした諸事情を考慮した場合、些細な誤差をもって事の当否を挙げつらう事はできない。今、任乃強氏の巴第一峽、東突峽Ⅱ黄葛峽説も今後の疑問として残しておきたい。

一方、劉琳氏は、〈劉氏校注〉（五八―五九頁）で、「広徳嶼」について詳細な注を付し、〈輿地紀勝〉卷一七五、〈夔州路・重慶府〉、〈芸文類聚〉卷六、および〈太平御覽〉卷五三（前引M参照）の諸説を引き、「広徳峽」の誤りと断じ、その上で

（X）巴之三峽在巴県与枳県之間、（略）查今重慶至涪、峽之著名者亦有三、即銅鑼峽・明月峽・黄草峽、（略）東突峽当即銅鑼峽、在今重慶市東北四十里、明月峽亦見于〈水経注〉、江水、（略）広徳峽即黄草峽、在今長寿県東南三十里、在漢・晋枳県界

とされ、任乃強氏と東突峽Ⅱ銅鑼峽説は一致するが、前記したような距離にさらに十里加わっており両者の距離の差が益々広がっているように思われる。

次に明月峽であるが、任乃強氏は（U）で、明月峽と広徳嶼が極く近くにあるとするが、劉琳氏は（X）で一峽とし、広徳嶼と別とみる、歴代諸史料も明

月峡は一峡として中間的位置に独立しているようである。ただし、前掲『峽江図攷』および『東帰録』ではともに明月沱として峽名としていない。

次に黄草峡の問題がある。『任氏校補図注』では次のようにいう、

(Y)与黄葛(東突)、明月爲巴郡三峡、今長寿県係巴県分置、別黄草峡(鶏鳴峡)亦当是古江州与枳県界、亦即魏晉時巴郡与涪陵分界、此言「巴亦有三峡」、不能失鶏鳴峡明矣、故補四字

とし、更に常璩の「其郡東枳」について、「東枳」を一個の地名と見、『蓋謂今之木洞鎮、在明月峡外』とし、また、広徳嶼は、『応爲水中州、不当是峽名』としている。ただ、東枳を木洞鎮とすると、明月峡、鶏鳴峡などの位置関係からみて、枳県に移動もしくは枳県治を分けるような問題があったと言ふものであろうか。何故なら枳県は巴の東であり、「東の枳」と方向感覚が合わないかのようである。後世の黄草峡の位置と共に気にかかる問題である。任乃強氏は、『庶還常旧』とあるが、その常璩が、実際の峽名を東突・明月二峽名しか挙げていない所に問題が残っているのであり、また、(J)の『水経注』では明らかに『又東至枳県西』と東と枳を分けているのである。その点、劉琳氏は前掲(X)の中で、任氏と同じく江州県から枳までの間に三峡を見ようとし、東突峡、明月峡、広徳峽をもつて、現在の銅鑼峡、明月峡、黄草峡に合致するとされる。ここでも問題の黄草峡および鶏鳴峡について、諸家の説で対比してみよう。

先ず(L)の楊守敬の挙げる諸説は唐以後の説で専ら『水経注』のいう黄葛峡は黄草峡であるとする。しかし、『水経注』の順序から言つて明月峡の前にあるのは問題があり、①黄葛峡と黄草峡は異なる。②常璩および酈道元の時代に黄草峡は記録されなかった。③黄草峡は黄葛峡と言われており、

『水経注』は単に順序を間違えたのではないか、などである。その他は任乃強氏、劉琳氏が結論した過程にある問題である。

今、仮りに、黄葛峡が黄草峡とすれば、木洞鎮がどこか、先にあげた『支那省別全誌』では、重慶から木洞まで水路二一・〇哩すなわち三八、八九二米、清里で約七〇里である。明月峡が木洞にあるとすると、前掲により『明月峡之下百余里(明里)』とあり、仮りにこれが水程とすると、約五五km下流ということになる。『大清一統志』卷二九六・重慶府、関の条に『木洞鎮、在巴県東九十里、明置水驛於此』とある。前掲『峽江図攷』も南岸木洞に『距渝城九十里』として、その西側手前南岸に「明月沱」を描いている。任乃強氏の説から言う、重慶から三八、八九二米約四〇kmの木洞からさらに五五kmを加えた約九五km、一七〇清里に当る。前掲『新修省別全誌』では、長寿県の四・五哩(約八・三km)下流の黄草峡まで重慶から四五・五哩、八四、二六六米約八五km、約一五〇清里となる。しかも前引(N)・(O)の通り、鶏鳴峡は『水経注』以降も存在する峽谷であるのに、任乃強氏は黄草峡は鶏鳴峡と同一とし、劉琳氏は無視されている。前引(3)および(8)に有る通り、鶏鳴峡ははっきりした独立峽である。枳即ち涪陵県は(L)のように巴の東四〇〇里、『大清一統志』卷二九五・重慶府、涪州の条で『在府東少北三百十里、(略)西至長寿県界六十里』とあり、前掲『新修省別全誌』では水程六五哩、一二〇km、二二三清里に当る。『峽江図攷』では、長寿県の下流、北岸に『黄葛峡、今名黄草山、涪州界距城十八里、上属長寿、下属涪州』とあり、鶏鳴峡には触れていない。陶澍『蜀輶日記』は嘉慶十五(一八一〇)年十月に巴峡に入っているが、江北八十里の明月峡を越え、三十里下流の木洞、さらに江北二百里の長寿県を越え、涪州境に入つて

巴三峽諸説（付関連事項）（アルファベットは本論参照）

<p>三峽 (E)蜀都賦</p> <p>巴東之峽 (F)〈江都賦〉</p>	<p>〈1〉文 (晋)選</p>
<p>巴亦有三峽 (H)① 東突硤 (H)①</p> <p>明月峽 (H)① 其郡東枳有——</p> <p>(広徳嶼) (H)①</p>	<p>〈2〉華陽國志 (晋)</p>
<p>塗山 (J)江之北岸 黃葛峽 (J)江水篇 江北岸塗山陽関巴 子梁巴之三関之一 江水又東経——</p> <p>明月峽 (J)江水篇 江水又左逕—— 東至利郷</p> <p>鷄鳴峽 (J)江水篇 江南岸枳県治</p>	<p>〈3〉水經注 (魏)</p>
<p>鷄鳴硤山 (Q)涪陵県 在県西十五里蜀將 鄧芝至——。</p> <p>黄李硤 (P)江南道涪州 上元二年因—— 有獠賊結聚</p>	<p>〈4〉元和郡県圖志 (唐)</p>
<p>明月峽 卷一六八・州郡部 山南道・渝州 〈李膺益州記〉日 ——在巴県東壁高 四十丈有凹孔形如 满月因以為名 〈華陽國志〉 郡江州県有—— (M)卷五三、注40 〈李膺益州記〉 広陽州東七里水南 有遮要二埧石、石 東二里至——② 〈庾仲雍荊州記〉 巴陵楚之世有三峽 ——・広徳峽・東 突峽即今巫峽・秭 歸峽・歸郷峽。</p>	<p>〈5〉太平御覽 (宋)</p>
<p>明月峽(M)④ 在(巴)県東八十 里〈華陽國志〉郡 江州県有明月峽即 是④ 〈李膺益州記〉 ⑤②に同じ⑤</p> <p>塗山(W) 在県東南八里東接 石洞峽 陽関(K)③ 涪州界 石洞峽(J)④ 理州東二十里劉備 置関東西約長二里 ③</p> <p>鷄鳴峽(O) 〈四夷県道記〉 沂蜀江十五里</p>	<p>〈6〉太平寰宇記 (宋)</p>
<p>明月峽 卷三三・夔州路、 巴県 有縉雲山、——、 大江</p> <p>鷄鳴峽 卷三三・夔州路、 涪陵県 有——山</p>	<p>〈7〉輿地広記 (宋)</p>

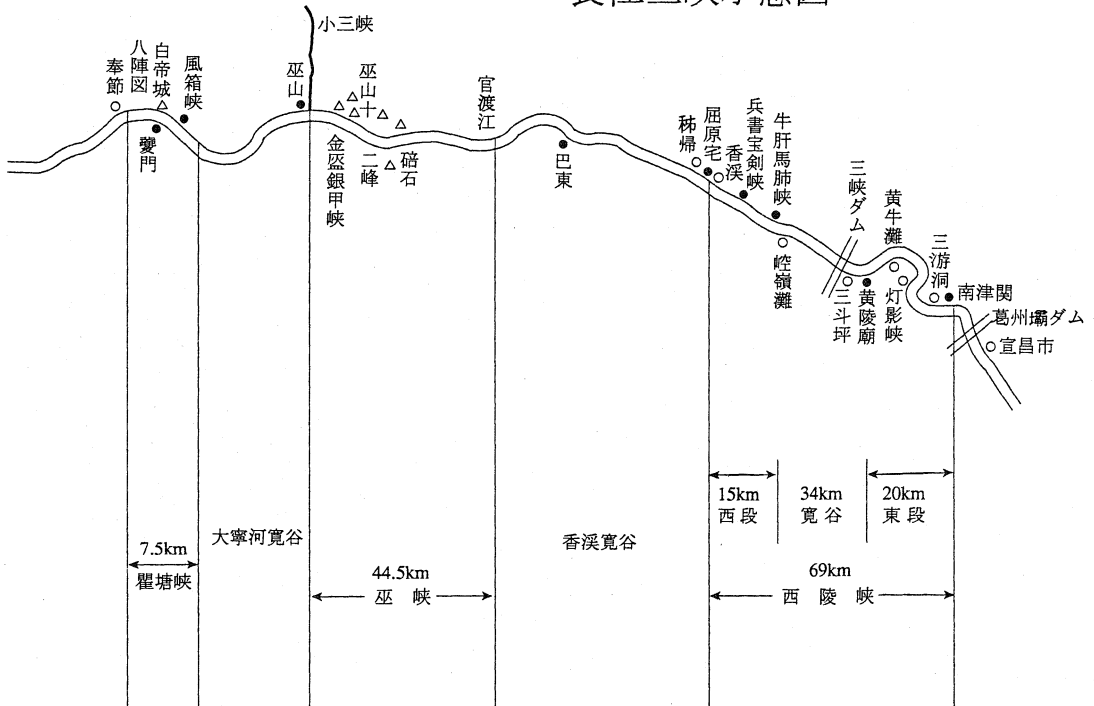
<p>三峡</p> <p>涪於——為要郡</p> <p>卷一七四・夔州路</p> <p>涪州（風俗形勝）</p> <p>巴亦有——</p> <p>卷一七五・夔州路</p> <p>重慶府（風俗形勝）</p> <p>①と同じ、但し広徳峽とする</p> <p>（景物）</p> <p>《華陽国志》</p> <p>巴亦有——</p> <p>明月峽</p> <p>（景物）</p> <p>《輿地広記》在巴県、⑤と同じ</p> <p>石洞峽</p> <p>（景物）</p> <p>③と同じ。ただし「有法華院」を加</p> <p>う</p> <p>広徳峽</p> <p>《華陽国志》</p> <p>（H）と同じとする</p> <p>鶏鳴峽</p> <p>卷一七四・夔州路</p> <p>涪州（景物）</p> <p>《元和郡県志》</p> <p>④aと同じ</p>	<p>〈8〉 輿地紀勝（南宋）</p>
<p>塗山</p> <p>（R）巴県東有——。</p> <p>陽関</p> <p>（S）涪州）又西有——</p> <p>明月峽</p> <p>（R）大江経城南、又東経——、至城東、与涪江合</p> <p>東有銅鑼関</p> <p>《華陽国志》</p> <p>広徳嶼者は也</p> <p>黄草峽</p> <p>（S）大江自長寿県流入、東逕——。</p>	<p>〈9〉 明史地理志（明）</p>
<p>明月峽</p> <p>（T）巴県境</p> <p>石洞峽</p> <p>（T）在巴県</p> <p>《華陽国志》</p> <p>巴亦有三峽謂此</p>	<p>〈10〉 大明一統志（明）</p>
<p>陽関</p> <p>（K）</p> <p>黄葛峽</p> <p>（L）巴県東</p> <p>（J）④《水経注》</p> <p>黄葛渡即黄葛峽</p> <p>石洞峽</p> <p>（5）在巴県東北二十里③と同じ。</p> <p>明月峽</p> <p>（M）在県東五十里</p> <p>（6）巴県東北</p> <p>《華陽国志》</p> <p>（H）①と同じ</p> <p>《李膺益州記》</p> <p>（5）（M）②・⑤と同じ</p> <p>広陽州東七里</p> <p>銅鑼峽</p> <p>（7）巴県東二十里</p> <p>鶏鳴峽</p> <p>④元和志</p> <p>涪州西十五里</p>	<p>〈11〉 大清一統志（清）</p>
<p>明月峽</p> <p>黄葛峽</p> <p>（即）東突峽</p> <p>（今）銅羅峽・石洞峽（是也）</p> <p>広徳嶼</p> <p>（及鶏鳴硤）（峽）（補四字）</p> <p>黄草峽（鶏鳴峽）</p>	<p>〈12〉 任乃強氏</p>
<p>明月峽</p> <p>東突峽</p> <p>（当即）銅鑼峽、重慶市東北四十里</p> <p>広徳峽</p> <p>（応即）黄草峽長寿県東南三十里</p>	<p>〈13〉 劉琳氏</p>



巴三峡示意图



長江三峡示意图



三十里にして『黄草峡、過凡三十里、蘭市、(略)過火烽灘、南岸古雞鳴峡、又十五里、泊涪州』と両峡の位置を示して明らかに両者の差を示している。

以上のような諸々の条件は、さらに各種の史料を正確に照合しなければならぬが、本稿では、止むを得ず、これまでの諸記録から見て次のように私見を加えておきたい。

常璩が(H)で『故巴亦有三峡』とした際の「亦」とは何を意味したのか、後述する巴東三峡の知識が既に常璩に把握され、巴にも亦有としたのか、或いは前掲『三都賦』Eに対し「亦」としたのか、いずれにせよ、三国時代、蜀と呉の同盟と抗戦は、巴・蜀の地に、長江流域の豊かな知識をもたらしたものと思われる。そうした上でもう一度、常璩(H)の本文について言えば、『其郡東枳有…』は、『其の郡の東の枳に』か或いは『其の郡の東の枳までに』と読むべきではないか。それによって、巴の三峡は、明月峡より枳までの間に有るものとして、他の二峡が省かれていたか、或いは広徳嶼以下に何らかの記事があつて、それが後世欠落していったものではないか。『華陽国志』・『水経注』そして現代を一直線につなげて現在地に比定するのは実は大変困難なことではないのか、それは次節でも取り扱ういわゆる巴東三峡の名が時代により種々異つてきたことも無関係ではない。結論を出さず甚だ無責任の譏りは免かれないが、今は巴峡三峡が、重慶市と涪陵県の間、むしろ涪陵県寄りにあつたのではないか。そしてこの三峡こそ古代巴蜀の民の峡谷として認識されていたのではないかと、言うに止めたい。因みに、竹添井々は明治九(一八七六)年七月二十二日に唐家沱に一泊した後、「二十三日、船初めて巴峡に入る。沿岸に石の山あり土の山あり。(略)草峡を過ぐ。」と記している<sup>(53)</sup>。

#### 六、三峡諸説をめぐって——現三峡の構成と歴史的役割

『華陽国志』を中心に長江三峡の原初的あり方を探ってきたが、いわゆる巴の三峡には他にも三峡の存在を伺わせるかのようであつたが、常璩はそれ以上には言及しなかった。巴・蜀史を中心とした地理的限界のためと、東方への行路は漢水流域を通じての交通路に頼っていたとも言えるからであらう。ただし、その前後を通じ、特に三国時代、魏・蜀・呉の対抗上、特に、蜀と呉の交通上、長江峡谷は重要な交通ルートになつてきた。その結果、『水経注』に現れる様に三峡についてのはっきりした概念が形成されるとともに、巴の三峡より、より險狭な「巴東三峡」が、一方で関所となり、一方で軍事戦略ルートとして活用されることになつた。『水経注』前引Aで示すように、広溪峡(現瞿塘峡)を「三峡之首」とするのは、上流からの記述上当然であるが、三国時代、特に下流の呉の側からみると、未だ三峡全体を捉えるより、大峡谷への入口としていかに蜀の南下を防ぐかが大きな課題になつていた。それと同時に浮上するのは山谷深くこの三峡地区に入り住む蛮夷の存在である。<sup>(54)</sup>特に蜀はこの少数民族を配下に組み入れ南化策を計つていた。一つの例を示すと、荊州を領した關羽が呉將陸遜に攻陥され、その復讐として蜀主劉備が呉への進攻を計つた有名な夷陵の戦いにおいてである。

『三国志・蜀志』卷三二・先主伝に

章武(AD二二一)元年、(略)秋七月、遂帥諸軍伐呉、孫權遣書請和、先主盛怒不許、呉將陸議・李異・劉阿等屯巫・姊帰、將軍吳班・馮習自巫攻破異等、軍次秭帰、武陵五谿蛮夷遣使請兵、(略)(二年二月)先主

自姊歸率諸將進軍、緣山截嶺、於夷道號亭、駐營、自假山、通武陵、遣侍中馬良安慰五谿蠻夷、咸相率響應、(略)先主自號亭還姊歸、(略)由步道還魚復、改魚復曰永安

とあり、これを呉側からみると、同呉志卷四七・呉主伝に、

(建安)二十四年、(略)陸遜別取宜都、獲秭歸・枝江・夷道、還屯夷陵、守峽口以備蜀、(略)十二月璋司馬馬忠獲羽及其子平、(略)(二十五年)是歲、劉備帥軍來伐、至巫山・姊歸、使使誘導武陵蠻夷、偁与印傳、許之封賞、於是諸県及五谿民皆反爲蜀、(略)黄武元年春正月、陸遜部將軍宋謙等攻蜀五屯、皆破之、斬其將、三月(略)、蜀軍分拠險地、前後五十餘營、遜隨輕重以兵応拒、自正月至閏月、大破之、臨陳所斬及投兵降首數万人、(略)是歲改夷陵爲西陵

とあり、同卷五八・陸遜伝に

備從巫峽・建平連圉至夷陵界、立數十屯、以金錦爵賞誘動諸夷、(略)先遣呉班將數千人於平地立營、(略)遜曰、吾已曉破之術、(略)斬張南・馮習及胡王沙摩柯等首、破其四十餘營、

とあつて、後世に通ずる巫峽が蜀・呉の争界地であり、上流を制すれば、西陵峽口が攻守の争界地となることを示している。それと同時に、漢側による武陵蠻夷への金帛および官爵による誘導は、後の三峽地域の交通にも大きな影響を残すのである。

三国呉の滅亡もまた晋側による長江上流からの舟艦による脅威が現実のものであつた。三国時代以後も歴代王朝による内乱、王朝交替ごとに、長江の上・下流域における軍事的価値は益々強められて行つた。しかも、南北朝対立の時代、両者対立の前線において、部族集団毎に軍事的に利用さ

れた蠻夷の動向が、三峽地域にも大きく影響を与えずにはおかなかった。例えば、〈宋書〉卷八・明帝紀、泰始五(四六九)年十二月に

庚申、分荆・益州五郡置三巴校尉

とあり、〈太平寰宇記〉卷一四八・山南道、夔州の条に

宋泰始三年、三峽險隘多山、蠻拠峙以爲寇賊、立三巴校尉以鎮之、宋末廢三巴校尉

と、年代に問題があるが、三峽の状況を記す。さらにそのことを〈資治通鑑〉卷一三五・宋紀、明帝泰始五年十二月の条に

分荆州之巴東・建平、益州之巴西・梓潼郡、置三巴校尉、治白帝、先是三峽蠻・獠歲爲抄暴、故立府以鎮之、

と具体的に記す。こうした状況をまとめ〈宋書〉卷九七・夷蠻伝に

世祖大明(四五七―四六四)中、建平蠻向侯侯寇暴峽川、巴東太守王濟・荆州刺史朱修之遣軍討之、光侯走清江、清江去巴東千余里、時巴東・建平・宜都・天門四郡蠻爲寇、諸郡民戸流散、百不存一、太宗順帝世(四七七―四七八)尤甚、雖遣攻伐、終不能禁、荆州爲之虛散

とあり、同伝には『荆・雍州蠻、槃瓠之後也、(略)所在多深險、居武陵、(略)而宜都・天門・巴東・建平・江北諸郡蠻、所居皆深山重阻、人跡罕至焉、前世以来、屢爲民患』とあり、蠻名は所在地域により名がついたとすれば、巴東(今の巴東県)や建平(今の巫山県)蠻はさしづめ〈資治通鑑〉の三峽蠻とも言い得るのであろう。南北両朝の対立の間に漢側の恩賞による利益誘導が一方で蠻の膨張をもたらすと共に重圧に対しては逃亡して勢力の温存をはかる、そうした後背地の一つに三峽があり、船舶を利用して峽路を制圧する姿が浮かび上るのである。

《周書》卷四九・異城伝に、

蠻者盤瓠之後、族類蕃衍、散処江、淮之間、汝、豫之郡、憑險作梗、世爲寇乱、逮魏人失馭、其暴滋甚、有冉氏・向氏・田氏者、陝落尤盛、余則大者万家、小者千戸、更相崇樹、僭称王侯、屯扼三峡、断遏水路、荆蜀行人、至有仮道者、

とあり、当時の状況を漢側からの眼として記録している。

歴代正史には、いわゆる巴東三峡についての相当の記述があるが、多くは西陵峡口を意味する「峡口」または「峡川」或いは単に「峡」といい、時に「巫峡」、「西峡口」があるが、この《周書》に至るまでついに「三峡」なる用語は使われていなかった。この少い用例で一つの破天荒な三峡利用計画が隋代に起きたことを見ておきたい。《隋書》卷四八・楊素伝に、

素居永安、造大艦、名曰五牙、上起樓五層、高百余尺、左右前後置六拍竿、並高五十尺、容戰士八百人、旗幟加於上、次曰黃竜、置兵百人、自余平乘・舳艫等各有差、及大挙伐陳、以素爲行軍元帥、引舟師趣三峡、軍至流頭灘、陳將戚欣、以青竜百余艘、屯兵數千人守狼尾灘、以遏軍路、其地險峭、諸將患之、素曰、勝負大計、在此一挙、(略)乃以夜掩之、素親率黄竜數千艘、衝枚而下、(略)遲明而至擊之、欣敗走、(略)素率水軍東下、舟艦被江、旌甲曜日、素坐平乘大船、(略)陳南康内史呂仲肅屯岐亭、正扼江峡、於北岸鑿岩、綴鉄鎖三条、横截上流、以遏戰船、素与仁恩登陸俱発、先攻其柵、仲肅軍夜潰、素徐去其鎖、仲肅復扼荆門之延洲、素遣巴蠻卒千人、乘五牙四艘、以柏檣碎賊十余艦、遂大破之、俘甲士二千余人、仲肅僅以身免巴陵以東、無敢守者

以上長く引用した記事は、歴史的三峡利用のあらゆる状況を如実に示す

ものである。一つは、長江を利用した軍事的意義、特に境界を制圧する各

種の作戦、その①は、夜航は特に危険で、現代においても小船は港に停泊するのであるが、多くの舟師を引き入れそれを敢行したこと、その②は小船にしろ大船にしろ、航行は危険極まりないのに、高樓の巨船を四艘の他驚くべき多くの舟を作り動かすこと、③峡谷の狭所を利用し鎖をかけ、航行を妨げること、その④峡谷の少数民族、特に古くから長江流域に住む蠻民を多数発卒していることなど、これらは水路を知り、また多くの夷夫に当る人員が必要であることも見抜いた上での作戦であつた。特に水夫については、塩運搬船に乗り込んだ前掲竹添井々は、<sup>(56)</sup>

船に爐一、漿(櫓の短小なる者)四あつた。何れも七八人の力を以て之を繰縦することが出来る。一年長者が大きい竹の鞭を持って左右を指揮していた、(略)舟子が懈けると、怒号してその背中を撻つ。背中が腫れて黒紫色を爲し、しばらくにしてその創痕が層々と背中に盛り上る。酸鼻の極で観るに堪えなかつた。

これは重慶を出て巴峡に入る直前の日記の一部である。下流に向つてこのようであると、上流に向かう時の舟子、或いは夷夫などは大変な負担を荷つたに違いない。

以上の各種の事例からみて、歴代正史の各々の記事を通覧して「三峡」の統名が初出するのは、《周書》(唐・令狐德棻、貞観中撰)であり、また《隋書》(唐・魏徵等、貞観一〇《六三六》年撰)などで、《文選》の郭璞《江賦》における、「巴東峡」からは、遥かに後世のことである。

しかし、この三峡が唐代に入ると、経済的な意味をもつものとなつてきた。詳細は尽せないが、前引(P)の《元和郡県図志》は、記事が続けて次の

ように記す。

元和三(八〇八)年、中書侍郎平章事李吉甫奏曰、涪州去黔府三百里、輪納往返、不踰一旬、去江陵一千七百余里、途經三峡、風波沒溺、頗極難危、自隸江陵近四十年、衆知非便、疆理之制、遠近未均、望依旧屬黔府とあり、江陵は(旧唐書)卷三九・地理志、山南東道に、『荆州江陵府、隋爲南郡、(略)上元元(七六〇)年、九月、置南郡、以荆州爲江陵府、(略)又割黔中之涪、湖南之岳、(略)八州、增置万人郡、以永平爲名』とあるように、今の湖北省江陵県であり、三峡の險を冒してまで貢納の便に長江が利用されたのである。

こうした交通上、次第に重要になってくると、この三峡の内容を具体的に列記した当時の地理書も各種あつたに違いない。現在はその多くの多くは伝わっていないが唐・欧陽詢の(芸文類聚)卷六・地部・峡によると

庾仲雍荆州記曰、巴楚有明月峡、廣德峡、東突峡、今謂之巫峡、秭峡、歸郷峡

とあり、(太平御覽)卷五三・地部、峡では同一記事であるがただ『巴陵楚之世有三峡、明月峡、廣德峡・東突峡、即今之巫峡・秭郷峡・歸郷峡』とあり、明かに(華陽国志)を式台にしていると思われるが、両者とも地理的に誤解がある様であり、三峡の個々の名称に相当の違いがある証左である。また、例えば、宋代の(大平寰宇記)は、卷八八・劍南東道・合江県の条で(峡城(程)太平御覽)卷五三・地部(記)を引き、『三峡者即明月峡・巫山峡・広沢峡・其有瞿唐・灩澦・鸞子・屏風之類皆不預三峡之数』とあり、同卷一三五・山南西道、利州・綿谷県の条に『三峡謂、巫峡・巴峡・明月峡、唯、明月峡在此郡界』と、全く方角違いの解釈があり、

さらに、同書卷一四八・山南道、夔州・奉節県の条では『三峡山謂西峡・巫峡・歸郷』とあるとともに、『灩澦堆、(略)瞿唐峡口、(略)瞿唐峡在州東一里古西陵峡也』とする。こうした三峡の異名が多出するのは、特に唐・宋時代、多くの文人官僚が長江を中心に任地への行き帰りに記す、それぞれの峡名が言われ、景觀がより豊かに印象深くなった為でもある。本稿では当初それらを整理して、その一つ一つの淵源にまで遡る予定であったが、紙数の関係で、それを省き、既に引用した(水経注)(A)以下の記事がほぼ諸峡を紹介しているものとし、ただ(大清一統志)卷二七三・宜昌府、卷三〇三・夔州府に掲げる小峡名のみ挙げてみる。

明月峡(東湖県西二十里、一名扇子峡)、松門峡、西陵峡、馬肝峡、白狗峡、空舸峡、兵書峡(又名鉄棺峡)、棺木峡、破石峡、建陽峡、竜口峡、東奔峡、巴峡、門扇峡、巫峡(以上卷二七三)、瞿唐峡(卷三〇三)このほかに、現代でも、宝劍峡・牛肝馬肺峡・黄牛峡・灯影峡などが西陵峡内にまた金盃銀甲・錯開峡などがある。こうした多数の峡内峡からどれをもって三峡というか、諸説あつて実は二十世紀初頭まで、定まることはなかった。現に前掲(支那省別全志)(大正七・一九一八年刊)は第三章水路において「普通瞿唐峡、巫山峡、及宜昌峡を以て三峡と称することを普通とする。」と言っている。また、(申報六十周年記念中国分省新図)(上海申報館一九三六年)の地図上においても、上流から、瞿唐峡、巫峡とし、ついで三斗坪を境に上に黄牛峡、下に西陵峡、と記入されている。

こうした様々な峡名について、(水経注疏)は、同卷三三の『斯乃三峡之首也』において諸家諸説を注記した上で、清、陶澍(蜀輶日記)<sup>(57)</sup>を引き諸説紛紛、断以夔峡・巫峡・西陵峡、因親歷其境目擊其阻目長者、有此

### 三処

と紹介されるが、この陶澍は同書の中において

蓋自瀾瀨堆至虎鬚灘、統名瞿塘峽、一名広溪峽、即夔峽也、(略) 統名巫峽、(略) 統名西陵峽

として、一旦は瞿塘峽を統名としているのである。これらの諸説をとりまとめ、宋・陸游の〈入蜀記〉(乾道六・一一七〇年遡上)に訳注を施した米内山庸夫氏は、同書の「後注二」で三峽について詳しく注した後、

昔は瞿唐峽を西陵峽または広溪峽と称し、西陵峽、巫峽、帰峽を所謂三峽と称した。帰峽は帰州諸峽を引くくめて云ふものであり、即ち巫山以東湖北省の諸峽を云ふ。今は普通、瞿唐、巫、西陵の三峽を所謂三峽となしているが、この西陵峽は宜昌の西北二十五支里の峽即ち三峽の東入口の峽を指しているものである。(一四六頁)

この書は昭和十九(一九四四)年の刊行であり、米内山氏は自らも、〈雲南四川踏査記〉<sup>(59)</sup>を著しており、当地を知悉したものの発言である。こうした現今の三峽が認識される背景には、すでに触れたように、二〇世紀初頭以降、水道改修工事が行われ、大型船舶が航行することによって、時間の短縮が距離感のみでなく、風景観をも若干変えていった結果からではなかったであろうか。

### おわりに — 新三峽への期待

本稿では、現三峽と、これからの三峽のあり方についてもっと深く触れる筈であった。しかし、歴史的な三峽が必ずしも一カ所ではないこと、三峽の歴史的意義について、従来の危険認識と文学的興趣以外に、経済的・

軍事的利用や少数民族の後背地としての意義があるなど、問題が多岐にわたっているが、紙数の都合もあり、解説の域を出ない嫌いがある。今後、稿を改めさらに個々の問題を深めて行きたい。その際、李白の有名な詩、〈我眉山月歌〉における『夜発清溪向三峽、思君不見下渝州』における三峽が、前掲〈蜀都賦〉における三峽と、〈水経注〉以後、文人、官僚に知られた巴東三峽とも合せ考え、本稿で取り上げた巴の三峽以外にもあったのではないか、渝州重慶を下るまでに「不見」とは何であったかなどを考え合わせ、さらに課題があるのではないかと考えるものである。

ともあれ、世紀を画する三峽ダム工事は、中国において、すでに既成の事実となっている。この稿をまとめていく内にも、仮堰堤の締切りが刻々と迫っている思いがする。現在でも、この工事を危惧する世界中の意見があることは筆者も関心あるものの一人として知っている。確かに、土砂の堆積によるダム破壊も気になる。五千年前のものとされる大溪遺跡が水中に没して、更に追跡する機会が失われることも気懸りである。われわれは一九九六年八月武漢において、この工事の設計面を担当する、水利部長江水利委員会技術委員会の科技外事局合作処(副所長蔣仲祥氏)を訪問し、卒直にこの質問をした時、同技術委員会の総工程師陸徳源氏は、それでも断固とした口調で、工事は中国の国を挙げて七十年來鋭意研究し尽した成果であり、万全の対策を構じていること、ダムの完成によって十二億中国人民に与える福利の偉大さは計り知れないことを説き、その上、新たな三峽が必ず実現すると力説された。われわれもこの工事が完璧に完成されることを願うものであるが、筆者は本稿との関係で奇妙なことに思い至ったのである。西陵峽が三斗坪を境に、上段、下段に分れることは先に記した。

今度のダム工事によりこの下段の、歴史的には狹義にして本来の西陵峡のみ、ダムのすぐ下流に依然として美しい景観を残すことになる。とすれば、ダム完成後は、従来の三峡は単に一峡となるか、新四峡となるのか、新たな期待が湧くのである。

この稿を草するに当り、一九九六年度三峡行に同行された本研究所針生清人所長および谷口房男教授のほか、《華陽国志》訳注研究グループ、本学中国哲学文学科川崎ミチコ助教授、本研究所研究員竹内老子氏、それに本学協定校の華中理工大学外語系助教授陳俊森氏および同大学関係の各氏に大きな励ましと助力を得た、特に記して感謝に代える次第である。

注(文中敬称略)(常用漢字・現代仮名遣い使用)

- (1) 石銘鼎・栾臨濱等編著《長江》(中国地理叢書・上海教育出版社一九八九)六頁に『2河段的画分 習慣上人們把江源到湖北宜昌一段画為長江上流、長四五一二公里、占整条河流全長七二%。上游面積一〇〇万平方公里、占長江流域總面積約五五・五%、把宜昌到江西湖口一段画為長江中游、長九三八公里、(略)把湖口到長江口一段画為長江下游』とあるなど参照。
- (2) 《中国三峡大辞典》「一、三峡地理」(湖北少年儿童出版社・一九九五・九刊)など参照。
- (3) 陶景良編《三峡工程一四〇問》(水利電力出版社・一九九四・十二)など参照。
- (4) これらの論議・検討の経過は既に多くのマスコミに取りあげられ、また専門の著書・論文も多くある。筆者は一九九六年八月、武漢・長江水利委員会訪問の際、《万里長江》(三峡工程前期工作專輯・一九九二年三月号)(同委員会宣伝新聞中心刊)などの主として技術関係の資料を入手する機会を得、また有効な討論も行った。
- (5) 中国国内には三峡ダム工事についての種々の反対があり、世界的話題や関心となつてゐる技術問題や環境問題、移民・歴史的遺産の問題などが指摘されてきた。しかし、中国は、一九九二年四月三日、全人代第七期第五回会議において、賛成一、七六七票、反対一七七票、棄権六六四票、無投票二五票で、『三峡プロジェクト建設決議』を採択した。異例な棄権の多さに潜在する危険の警鐘を打つ声が内外に上つていたが、一九九九年、孫文の提唱以来とされる流域住民の水害除去に対する悲願、および長期にわたつて研究し、改革解放の現代化に欠かせぬ事業として着工に至つてゐる。これ以後、中国国内の反対は、香港や海外に移されることになった。なお、日本においても中国人ジャーナリスト戴晴氏が着工反対の立場から著わした《長江・長江一三峡工程論争》の日本語版《三峡ダム・建設の是非をめぐつての論争》(驚見一夫十胡瑞婦訳・築地書館・一九九六年九月)が刊行されている。
- (6) 長江については種々の別称があり、特に三峡を含む四川省流域でも、『自宜浜至巫峡河段称川江、或称蜀江、亦称岷江・汶江・几江』(《中国水系大辞典》朱清道編纂・青島出版社、一九九三・「長江」の項)とあるように、最近まで川江と呼ばれることも一般化していた。
- (7) 鄭霖・柴宗新・鄭遠昌・傅綬寧著《四川省地理》(中国地理叢書・四川科學技術出版社・一九九四)、石銘鼎・栾臨濱等編著《長江》(中国地理叢書・上海教育出版社・一九八九)、前掲注(2)など参照。
- (8) 古賀登「古杜蜀国攷―三星堆出土遺物に寄せて」(《堀敏一先生古稀記念中国古代国家と民衆》汲古書院・一九九五所収)。徐朝龍・NHK取材班著《三星堆遺跡は何を語るか、謎の古代王国》(日本放送出版協会一九九三)など参照。なお最近、四川省成都・竜馬古城遺跡から中央基段をもつピラミッド状の祭壇跡とみられる、神殿都市国家の存在が考えられる遺跡が発見され、長江文明の古さを問う問題が提起され、一九九六年十一月、日本の各種のマスコミで取り上げられた。
- (9) 古代巴・蜀の歴史および中央との関係は次の諸書を参考とする。童恩正《古代の巴蜀》(人民出版社一九七七)、蒙文通《巴蜀古史論述》(巴蜀研究叢書・四川人民出版社一九八一)、同《論巴蜀与中国関係》(同上・一九八二)、徐中舒《論巴蜀文化》(同上・一九八一)、大庭脩「秦の蜀地経営」(《竜谷史壇》三三・一九五〇)、久村因「秦漢時代の入蜀路について」上・下(《東洋学報》三八・二・三、一九五五)、同「古代四川に土着せる漢民族の来歴に

ついで」(『歴史学研究』二〇四・一九五七) 他同氏の四川・雲南等に関する業績。狩野直禎「古代巴蜀史の再構成―伝承時代―」(『東洋史研究』三三・一九七六) 他参照。

- (10) 本稿では江蘇古籍出版社『水経注疏』(後魏酈道元注・清末楊守敬・熊会貞疏・段熙仲点校・陳橋驛復校一九八九) 本を主として使用した。なお、酈道元の紹介については、森鹿三『酈道元略伝』(『東洋学研究・歴史地理篇』一九七〇) があり、『水経注』は北魏正光五(五二四) 年頃までに成立したとされる。また、本注疏本について森鹿三氏同書は「楊熊二氏の水経注疏」としてその成本の経過を紹介(四九四―四九八頁) されている。

- (11) 『支那省別全誌・第九卷、湖北省』(東亜同文会編・一九一八)「第五編、交通運輸及郵電・第四章汽船及小蒸気・第四項三峡の汽船」二八九―三〇〇頁参照。

- (12) 前掲注(10) 参照。

- (13) 本稿では通常『宋本六臣注文選』(広文書局・一九七〇) および『梁蕭統編・唐李善注文選』(上海古籍出版・一九八六) を使用し、適宜他版を参照した。

- (14) 『三都賦』の作者左思については、『晋書』九二・文苑に左思伝があり、『復欲賦三都、会妹芬入宮、移家京師、乃詣著作郎張載訪岷邛之事、遂構思十年、門庭藩溷皆著筆紙、遇得一句、即便疏之、自以所見不博、求為秘書郎及賦成、時人未之重』とあり、中島千秋『文選(賦篇)上』(『新釈漢文大系』七九・明治書院、一九七七)「蜀都賦」(二四四頁) において「呉がほろんだのは二八〇年、そのころ『三都の賦』は完成しているであろう」とされている。なお、狩野直禎「三都賦札記・同(統)」(『八聖心女子大学論叢』第三四・三六集、昭和四四年十二月・四五年十二月) は、『三都賦』の成立過程を論じた後、左思が重点とした地誌、特に物産について、照葉樹林帯の特性を基盤に、長江流域文化の形成に注目すべきことを指摘されている。

- (15) 『晋書』卷七二・郭璞伝に『璞著江賦、其辞甚偉、為世所稱』とあり、かつて『璞既過江、宣城太守殷祐引為參軍』とあり、『王敦之謀逆也、(略) 敦怒璞、詣南岡斬之、(略) 時年四十九』とある。

- (16) 以上の巴・蜀についての地理、および巴の分郡の議については、東洋大学アジア・アフリカ文化研究所年報所収『華陽国志訳注稿』(1)・(2)・(3)・(4)

(船木勝馬編、一九七四、七五、七六、七七) 参照。なおこの訳注稿は一九七四年以来、専ら同研究所年報に随時掲載され、一九九六年年報で同誌となり、卷十一の途中まで進行(途中代表者谷口房男となる) している。本稿では便宜上、『訳注稿』と略称する。また、同『訳注稿』の地名比定は、青山定雄編『説史方輿紀要索引・中国歴代地名要覧』によっているが、現在地名と大きく異なる場合などについて、『中国歴代地名大辞典』(広東教育出版社・魏嵩山主編、一九九五) などで補正した。

- (17) 『訳注稿』(3) 注二五参照。

- (18) 『訳注稿』(3) 注四四参照。

- (19) 『訳注稿』(3) 注六参照。

- (20) 『訳注稿』(3) 注一参照。

- (21) 『中国古今地名大辞典』五帆の項参照。

- (22) 『訳注稿』(4) 注九参照。

- (23) 『中国古今地名辞典』江州県の項参照。

- (24) 『太平御覧』卷五三・地部、峽に「盛弘之荆州記曰、旧云自三峡取蜀数千

里中恒是一山、此蓋好大之言也、唯峽七百里中兩岸連山略無闕處、重巖疊嶂、隱天蔽日、自非停午・夜分不見日月、至於夏水襄陵沿流阻絕、或王命急宜有時云、朝發白帝、暮至江陵、其間一千二百里、雖乘奔御風、不為疾也、春冬之時、則素湍綠潭迴清倒影、巖生穠杳、懸泉瀑布飛其間、清榮峻茂良多雅趣、每晴初霜旦林寒澗肅、常有高猿長嘯屬引淒異空、岫伝響、哀轉久絕、故漁者歌曰巴東三峡、巫峽長、猿鳴三声淚沾裳」とある。盛弘之は、『隋書』卷三三・經籍志に「荆州記三卷、宋臨川王侍郎盛弘之撰」とある。

- (25) 鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』(日本学術振興会・一九五二)「秦郡考」および前掲注9大場論文など参照。

- (26) 『華陽国志』の成立については、同卷一二、序志に常璩道将として自ら編纂の立場を述べ、『又肇自開闢、終于永和三(三四七) 年、凡十篇、号曰華陽記』と記している。任乃強『華陽国志校補図注』(上海古籍出版社・一九八七) は常璩の生涯を詳しく年表に付して成立の事情を追及されている。また、中林史郎『華陽国志』(中国古典新書統編・明德出版、一九九五)「解説二、『華陽国志』の構成と内容、2 内容について」で、任乃強氏の意見を加



え、後人の改竄や加筆があり、永和三年終了説は確定できず、「使用者が個々に判断すべきもの」とされている。なお、狩野直禎「華陽国志の成立をめぐって」（『聖心女子大学論叢二』）は、常璩の撰述に至る経過の中で、各地における人物を中心とした耆旧伝編纂の状況を詳述し、特に漢代より晋代にかけて著された蜀地に関する記述および耆旧伝について、「当時成長しつつあった地方豪族による地方分権化と何らかの関連があるのではないか」と究明された。本稿では、常璩撰顧広折校・国学基本叢書「華陽国志・附校勘記」（商務印書館・一九五八）を底本とした。『華陽国志』の各種版本の系統および成立の事情については、久村因「華陽国志の版本について」（『名古屋大学教養部紀要第一七輯・人文科学・社会科学』一九七三）参照。

(27) 前掲注(26)参照。

(28) 劉琳「華陽国志校注」（巴蜀書社・一九八四）。

(29) 前掲注(26)参照。

(30) 前掲注(16)参照。

(31) 「詠注稿」1[20]注一四参照。

(32) 「呉船録」（二巻）には日本で訳文にすぐれたものがあり、本稿では主として下記のものを使用した。『陸游・范成大・竹添井々著、米内山庸夫訳注・入蜀記（入蜀記・呉船録・棧雲峽雨日記）』（大阪屋号書店・一九四四）、他に小川環樹訳「呉船録」（養徳社・一九四七・一九五九）がある。

(33) 「太平寰宇記」巻一三六・渝州、巴県の条に「（南齊）又自涪州界陽関移理属之」とある。

(34) 「明史」巻四三・地理志、重慶府・涪州の条に「又西有陽関」とある。

(35) 「大清一統志」清・和坤等撰（台湾商務印書館・影印文淵閣四庫全書）（以下単に「大清一統志」という）巻二九六・重慶府、関の条に「陰陽関、在巴県東、水経注江水東逕陽関巴子梁、江之兩岸猶有梁処、巴之三関斯為一也、延熙中車騎將軍鄧芝為江州都督治此、寰宇記州東北二十里有石洞峽、即劉先主置関之所、旧志今亦名石洞関」とあるが、後半の説は陽関と石洞峽の位置が合致していない問題がある。本論を参照。

(36) 徐堅「初学記」巻八・州郡部、江南道、神宿の条に「益州記曰、黄葛峽有相思崖、井泉周環、俗謂之神宿、已上涪州」とあり黄葛峽が涪陵県内にあったことを示す。

(37) 「杜詩詳註」（清・仇兆鰲注・文史哲出版、中華民国六五（一九七六））巻一五（一四三頁）所収、黄草の詩に「黄草峽西船不帰、赤甲山下人行稀、秦中驛使無消息、蜀道兵戈有是非、萬里秋風吹錦水、誰家別淚濕羅衣、莫愁劍閣終堪挽、聞道松州已被圍」とあり、黄草峽は「在涪州上流四十里」と注をす。

(38) 明・曹学佺「蜀中名勝記」（劉知漸点校・重慶出版社、一九八四）参照。

(39) 「大清一統志」巻二九五・重慶府、峽の条に「黄葛峽、在巴県東」として、「水経注」本論(3)を引いた後、「旧志塗山足有古黄葛樹下有黄葛渡、即黄葛峽也」として、(1)の「名勝志」とほぼ同文を引用している。なお黄葛樹について遅塚麗水「新入蜀記」（大阪屋号・一九二二）は重慶にて「但し随所に黄葛樹と称する大木の路に清陰を敷くあり、行旅の人は、就いて涼を取るなり、黄葛樹とは、熱帯地方にある榕樹の事にて、木質、石よりも固くて、鋸いて器具を作ることとも出来ず、又割いて薪材ともなりがたき」（同一三一頁）とある。

(40) 「太平御覽」巻五三・地部、峽の条に「李膺益州記曰、広陽州東七里、水南有逕要三、埽石、石東二里至明月峽、峽前南岸壁高四十丈、其壁有凹孔、形如满月、因以名」とある。

(41) 「太平寰宇記」巻一三六・重慶府、巴県の条に「明月峽在県東八十里、華陽国志云、郡江州県有明月峽即此、李膺益州記広陽州東七里、水南有逕要三、埽石、石東二里至明月峽、峽首南岸壁高四十丈、其壁有孔、形如满月、因以爲名」とある。

(42) 「大清一統志」巻二九五・重慶府、山川の条にあり、本論(6)明月峽の項参照。ただし、注41に比し、「峽首西岸」とあるのは、江水の方向が東北とあり南岸の間違ひではないか。その上で、さらに続けて、「府志県東五十里」とあるが水程が陸程かなど不明である。

(43) 「元和郡県図志」巻三〇・江南道、黔州觀察使・涪州、総叙の校勘記（中国古代地理総志叢刊下・中華書局）参照。

(44) 前掲注40・41参照。

(45) 「太平寰宇記」巻一三六・渝州、巴県の条に「今理州東二十里有石洞峽、即劉備置関之所、東西約長二里」とある。

(46) 清・吳翊「蜀遊日記・蜀遊後記」（小方壺齋輿地叢鈔卷三七所収）

(47) 〈伊東忠太見聞野帖清国Ⅱ〉(伊東忠太清国刊行会・柏書房、一九九〇) 第四卷四川(八二―八三頁)

(48) 清・洪良品《東帰録》(小方壺齋輿地叢鈔卷三八所収)

(49) 山川早水《巴蜀》(成文館・一九〇九)

(50) 鳥居龍三《人類学上より見たる西南支那》(富山房・一九二六) 六四五頁

(51) 江国璋《川行必讀峽江図攷》二冊(光緒一五―一八八九年識有り)。前掲注39の遼寧麗水は一九二六年に宜昌において「この夜、浦川副領事は、私に峽江図攷二巻を贈られた。私は初め、市にこの書を覓めたが、発兌の書肆が火災に遭って、今は絶本となっている」と記されている。また、前掲注47の伊東忠太は、岷江―宜昌まで刻明な沿岸地形図をスケッチしているが、地名の書き込みは少い。

(52) 清・陶澍撰《蜀輶日記》(小方壺齋輿地叢鈔卷三七所収)

(53) 前掲注32の竹添井々《棧雲峽雨日記》(三五三―三五四頁)

(54) 三国時代三峽において蜀に内通したのは、史料にある通り武陵五溪蛮である。《水経注》卷三七・沅水の条に『武陵有五溪、謂雄溪・楠溪・無溪・西溪・辰溪其一焉、夾溪悉是蛮左所居、故謂此蛮五溪蛮也』とある。後漢時代以降、六朝時代を通じ、中央権力を掌握する漢人側との拝官賜爵により付庸徙民される存在となった蛮夷は、やがてその所在地により名前が呼ばれる者と、もともとのお出自名を保持して、一早く漢側に戦闘集団として付属したものの、或いは自ら深山窮谷に逃れ、狩猟もしくは焼畑農耕で自存するものがあった。しかし、これも南北朝対立の中で、戦闘地域に組み込まれた場合は、権力側との対応がいや応なく迫られる。三峽地区に逃れこんだ巴郡南郡蛮の武陵五溪蛮もその逃辟ルート(現清江流域ルート)などを逆に蜀・劉備側により利用されたのであり、官爵・金帛をもって誘導懐柔され、前線に立たされていた。この後、この武陵五溪蛮は一旦、《三国志》卷六〇・鍾離牧伝・永安六(二六三)年のこととして、『斬惡民懷異心者魁帥百余人、乃其支党凡千余級、純等散、五溪平』と呉側に討滅されたとある。しかし、その後も蛮は《晋書》卷三・武帝紀、咸寧三(二七七)年十二月の条に『是歲、西北難虜及鮮卑・匈奴・五溪蛮夷・東夷・三国前後十余輩、各帥種人部落内附』とあるように、その存在を保ち、やがて巴東・建平蛮となり、或いは居住地により、三峽蛮として拡大し、宋・齊の時代所在の漢人側民戸を圧迫するまでに

なり、再び討伐の対象となるのである。これらの経過は後日稿を改め、さらに内容的に深めたいが、大旨、これらの蛮の動向については、多くの專論があり、一いちそれを記載すべきであるが、止むを得ず省略し、ここでは最近の成果として、谷口房男《華南民族史研究》(緑陰書房・一九九六年一月刊)「第一編・第一章」第四章、同「南北朝時代の蛮夷」(魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題・汲古書院・一九九七刊行予定)、川本芳昭「六朝期における蛮の漢化について」(史淵一八輯・一九八一・三)、同「六朝における蛮の理解についての一考察―山越・蛮漢融合の問題を中心として見た」(史学雑誌第九五編八号、一九八六年八月)、などの諸論稿、伊藤敏雄「中国古代における蛮夷支配の系譜―税役を中心として」(堀敏一先生古稀記念・中国古代の国家と社会・汲古書院一九九五)などを参照したことを記しておく。

(55) 楊素が率いた「巴蠻卒」とは、古くから長江流域の江上に住む蛮といわれ、

《華陽国志》卷一・巴志の中に既に『其属有濮賁・苴共・奴獯・夷蠻之蛮』とあり、同巴東郡にも『奴獯・夷蠻之蛮民』、同涪陵郡に『土地山險、水灘、人獯勇、多獵・蠻之民、(略)諸界北有獵・蠻、又有嶺夷也』とあり、隋初、楊素の水軍に水先案内および水夫として大量に徴発されたものではないか。蠻についても各説あるが、陳序経《蛮民的研究》(文史叢書蛮民的研究一冊、商務院書館・一九四六)ほか、特に小川博「中国史上の蠻(蛮)について」の諸学説の沿革について(一)(二)(三)(四)《海史研究》第十二号(一九六九・四)、同第十三号(一九六九・一〇)、同第十四号(一九七〇・四)、同第十六号(一九七一・四)、同第十七号(一九七一・一〇)は、蛮についての中国、日本および諸外国にわたる研究者の学説を網羅し、かつ詳細な内容の紹介があり、研究史上重要な業績である。

(56) 前掲注32(三五二頁)参照。

(57) 清・陶澍撰《蜀輶日記》(小方壺齋輿地叢鈔卷三七所収)

(58) 米内山庸夫訳注、前掲注32(一四四―一四七頁)参照。

(59) 米内山庸夫《雲南四川踏査記》(改造社・一九三五)参照。

(60) 斎伯守《長江の自然と文化》(講談社・一九四二)は「三峽の名称は風流人の随意に定めたもので必ずしも一定しているわけではない。普通には夔州と巫山県との間の瞿唐峽、巫山県と秭歸(帰)との間の巫峽、秭歸と平善壩との間の西陵峽とを三峽とする。(略)然るにこれに対して宜昌境内の三峽

なるものがある。明月峽・西陵峽・黄牛峽がそれである」(第十三章・巴山巴水、西陵峽・二五二頁)とある。

付記

明治期にチベット仏教の研究を志し、中国の四川ルートから入蔵を目指したが成功せず、遂に不帰の客となった能海寛(一八六八—?)に、三峽遡上の記録がある。能海は明治二六(一八九三)年、哲学館(現東洋大学)高等上級の課程を終了、一時、郷里の現島根県那賀郡金城町長田の浄蓮寺に戻っていたが、早くからチベット探検の必要を公表していた。明治三一(一八九八)年、東本願寺より正式に派遣されることにより、十一月神戸を出発、上海に渡り、同十二月宜昌から外国人の雇船に乗り込み、先づ重慶に向かった。

この能海寛の生涯を明らかにし、その業績を顕彰するため、地元金城町を中心に「能海寛研究会」が平成五年発足し、機関誌『石峰』が発行されている。旧年師走の遅くに、事務局長隅田正三氏にご連絡した時、新たに大量の資料、特に三峽のスケッチがあることもお知らせを受けた、新年早々にお送り頂いた『石峰通信』五号で、そのスケッチ五二コマの一部が紹介されていた。丁度、本稿を脱稿した直後であったが、急ぎ書信にて、全部の複写をお願いしたところ、心よくご承知頂き、詳さに拝見する機会を得た。図は巧みな素描に、通過地点と日・時を書き込、一ヶ月にわたる航路を風趣をもって仕上げられていた。その図の一枚、宜昌から雲陽県に至る地点名が記入した船程図に、『西陵峽』(又巴峽、黄牛峽、『巫山峽』、『瞿塘峽』)と三峽がほぼ現在統一名と同じように表されていて注目できるものであった。隅田正三氏始め関係者に感謝して付記するものである。